「多文化社会とコミュニケーション」愛知県立大学（2019年度）
第3回「多数派には名前がない―関係の非対称性について」

あべ やすし abeyasusi@gmail.com
http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2019/

今回は多文化主義の理念について確認したうえで、差別とはなにかを考える。
今回、共通の問題としてあるのが、「カテゴリー」をどのようにとらえるのか、という問いである。

「多文化」が政策になるとき―多文化主義をめぐって

カナダやオーストラリアなどでは、国の政策として「多文化主義」をかかげている。日本はそのような政策をうちだす状況にはなっていない。多文化と名のつく法律もない。しかし、日本も国連の国際人権規約や子どもの権利条約、人種差別撤廃条約などを批准している以上、「国際人権」という視点から社会を再統合するという課題を無視することはできない。そこで、多文化主義政策をめぐる議論について、おさえておく必要がある。
宮島喬（みやじま・たかし）は、『多文化であることとは』で、欧米諸国でゆるやかに共有されている多文化主義の定義をつぎのように説明している。

> 主流文化とは異なる文化特性をもつ人々の集団にとり、その文化は彼らの生き方を意味付け、支える重要な意味をもつのである以上、文化的差異を棄てさせるのではなく、許容する、すなわちその差異の保持、表出、伝達（教育）の権利を認める、という確認がそれである（みやじま2014:27-28）。

ひじょうに大事なポイントであるが、それを実践するとなると、べつの問いに直面することになる。鄭暎恵（ちょん・よんへ）は多文化主義（マルチカルチュラリズム）の「可能性と困難」について議論するなかで、つぎのように多文化主義の問題点を指摘している。

> まず、最初にあげられるのは、マルチカルチュラリズムを導入することで生じる、諸文化のステレオタイプ化という問題である。相互理解が可能となるよう、文化を規格化する問題といいかえてもいい。また、そうして規格化された文化を「尊重する」という名目で、「保存を義務化」することの弊害がある。本来、マルチカルチュラリズムは自文化に対して自己決定権を保障するために導入されたはずなのだが、ステレオタイプ化／規格化／保存の義務化というプロセスにはまった途端、本末転倒していく。他者化され、外から規定されることで、文化は内からわき出る生命力を失う。文化とは、ある人々がともにその風土の中で生き延びる（サヴァイヴ）ために編みだした生活様式だったのだから、状況に応じて当然変化するはずであった。が、マルチカルチュラリズムを通した途端、文化は「博物館」に陳列され、他者の賛辞は受けるかもしれないが〈見られる／記述される／評価される対象物〉となる。マルチカルチュラリズムの中で尊重されるべき文化かどうか、査定される必然性が生じるからだ。誰の目にも留まらない文化は、そもそも文化の一つとして数えられることもない。
> つまり、マルチカルチュラリズムは「文化は分類することが可能だ」という前提に基づいているわけだ。が、文化を分類するのはいったい誰なのか（ちょん2003:224）。

多文化主義を政策にかかげるならば、文化を査定し、分類し、そのうえで尊重するという状況が生じる。そこでは文化は固定的にとらえられ、状況に応じて変化するような生命力をうしなってしまう。文化をパッケージ化して、わかりやすく提示することで国家の承認をえるというような多文化主義では、文化は「見いだす」ものではなく、「規定されるもの」になってしまう。文化は、固定的なものではない。流動的なものである。はっきりと境界線をさだめることができるものでもない。複合的なものである。しかし、たとえば教育の分野でどのような文化や歴史をとりあげるのか（カリキュラム）をきめるとき、どこかに焦点をあて、きりとる以外に方法はない。どこかで本質化することはさけられないということだ。それなら、どうすればいいのか。

ふたつの「ちがい」、ふたつの権利（社会権と自由権）

ここで「多文化共生センターきょうと」のキャッチコピーに注目したい。このグループは阪神大震災のときに設立された「多文化共生センター」の京都支部として出発し、のちに独立した。現在は医療通訳などにとりくんでいる。

多文化共生センターきょうとの基本理念は、以下のふたつである。

> あってはならないちがいをなくす
> なくてはならないちがいを尊重する

あってはならないちがいとは、権利をめぐるちがいである。不平等や差別をなくすということだ（社会権）。そして、なくてはならないちがいとは、文化の多様性ということである。それはつまり、マイノリティに対する同化主義をやめるということだ（自由権）。多文化共生センターきょうとのサイトでは、つぎのように説明している。

> 国籍やことばによる「ちがい」による格差と排除（情報の格差、社会保障の制限・差別や偏見）をなくし基本的人権の保障を求めると同時にそれぞれの文化背景やアイデンティティなどの「ちがい」を認め尊重する（http://www.tabunkakyoto.org/about-us/）。

「国籍やことばによる「ちがい」による格差と排除」とは、どのような状況をさすのだろうか。「「ちがい」を認め尊重する」とは、具体的にはどのようにすることだろうか。文化という概念だけで説明（解決）できることではない。人権とはなにか、それを保障するための政策はどのようにあるべきかという議論が必要である。

差別ってなんだろう

多文化主義という理念は、ことばをかえれば、「差異の権利」と「反差別」ということだ。それでは、差別とは、いったい、どのようなことをさすのか。佐藤裕（さとう・ゆたか）は差別をつぎのように定義している。

> 差別行為とは、ある基準を持ち込むことによって、ある人（々）を同化するとともに、別のある人（々）を他者化し、見下す行為である（さとう2005:65）。

これはたとえば、「変なやつがいるぞ！」と指さし、仲間や周囲の人々によびかけるという状況をイメージしてほしい。そのとき、呼びかけた本人と周囲の人たちは、名前のない「われわれ」になる（同化）。このとき、その「われわれ」は自分たちを「ふつうの人」と規定している。そして、「変なやつ」と規定した人に、悪意をこめた名前をつける（他者化と見下し）。どのような人が「変なやつ」と指さされるか、わからないということがポイントである。

悪意をこめた名前というのは、たとえば「つんぼ」という差別語がある。自称としては、ろう者という表現が使用されている。マイノリティの名称には、他称と自称が同一の場合と、ちがう場合がある。マイノリティのなかでも、それぞれべつの自称をえらんでいる場合もある。「クィア」のように、差別的なまなざしがこめられた他称を自分たち（性的マイノリティ）の自称として、あえて選択する場合もある。「クィア（queer）」というのは、「ふつうではない」というニュアンスがあり、「変態」くらいの意味である。「そうですよ、ふつうじゃありませんよ」「ふつうって、なんなんですか？」という態度表明をこめているといえる。呼称やアイデンティティをめぐる問題は、多文化社会の重要な論点であるといえる。

差別のもうひとつの問題は、態度や発言などのコミュニケーションの問題にとどまらず、社会の制度にかかわることである。国籍や性別、身体などによって利用や参加を制限することについて、それぞれの是非を検討するということも、多文化社会の重要な課題であるといえる。

関係の非対称性について―多数派には名前がない（多数派は名前をしらない）。

差別について考えるとき、重要なのは、関係の非対称性に注目することである。差別は、権力関係によるものだからだ。ここで、「関係の非対称性」とはどのような意味なのかを確認してみよう。

たとえば、女医であるとか、女性総理ということばがある。一方で、男性の医者や総理大臣を、男医であるとか、男性総理というふうに呼ぶことはほとんどない。医者や総理大臣は、男性がするものだという認識があるからこそ、「例外」に特別な名前をつけるわけだ。しかし、それだと、オトコは普遍的で、オンナは「オトコではない」というあつかいをしていることになる。

記号論や社会学では、この場合の「医者」を「無徴（むちょう）」といい、それにたいして「女医」を「有徴（ゆうちょう）」という（有標／無標という場合もあります）。有徴とは「しるしがついている」ということだ。無徴は「それが標準」だと認識されているため「余分なラベルがついていない」。この有徴と無徴という関係にあることがまさに、多数派と少数派の関係を象徴しているのであり、このような関係を「非対称」であるという。

ふつうと認識されるものには名前がない、特殊だと認識されたものには名前がつけられる。そこで、多数派には名前がない、少数派には名前があるという現象がおきる。少数派の名前がつけられたあとに、少数派が多数派に名前をつけることもある。けれども、その名前を多数派はしらないことがある。「シスジェンダー」や「異性愛」「墨字（すみじ）」「聴者」「晴眼者（せいがんしゃ）」などがそれにあたる。

シスジェンダー　←→　トランスジェンダー
異性愛　←→　バイセクシュアル、同性愛
墨字　←→　点字
聴者　←→　ろう者、難聴者、中途失聴者
晴眼者　←→　盲人、弱視者

これらの名前（社会的属性、あるいはカテゴリー）の両方をしらずに「多数派に属するのものごと」を「ふつうの○○」と表現してしまうことがある。だれかを他者化し、特殊化し、その一方で自分たちのありかたを普遍化することであるといえる。これでは公平な態度とはいえない。
自分を無色透明の無徴な存在、中立的な立場、あるいは「社会で支配的な価値規範そのもの」としてとらえるのではなく、自分は、ふたつや、みっつ、あるいはそれ以上のなかの「ひとつ」であると、自分を相対化する必要がある。
自分を相対化しなければ、結局のところ、安全なところから「マイノリティ」をならべてあそんでいるにすぎなくなるからだ。他者について考えることは自分について考えることであり、その関係のありかたを考えることである。そこでは自分自身が問われる。自分を問いなおすなかで自分自身のイメージが、ゆらぎ、変化する。ときには、自分が、わからなくなったりすることもあるだろう。そのとき理解しておくべきことは、カテゴリーはどこまでも流動的であり、その境界線はあいまいであるということだ。たとえば、人によっては、自分のセクシュアリティについて、よくわからなくなることがある。それは当然のことなのだ。人間には「必然のすがた」というものはない。ゆらぐのが当然である。

異性愛ってなんだろう

わたしが韓国に留学していたとき、ある文章をよんで、とても刺激をうけた。それは「ある非異性愛者、異性愛を問う」と題する文章だった（ハン2003）。著者のハン・チェユンは異性愛者の意識について、つぎのように論じている。

> 異性愛者たちが「自分を定義すること」に没頭したりはしないというのは、よくしられた事実だ。そのためわたしたちは、とてもマジメに「異性愛の正確な意味はなんだろう?」と質問をなげかけても、かんたんにこたえを きくことはできない（354ページ）。

その理由は、そもそも自分を「異性愛者」とは意識していないからである。ハンはつぎのように説明する。

> まっさきに目につく一番の問題は、異性愛者たちが自分を「異性愛者」と認識するのではなく、「多数」と命名することにだけ慣れているという点だ（同上）。

ほとんどの異性愛者は、自分が「ふつう」で「正常」であると信じてうたがわない。そのため、「自分の存在について説明しなければならないのは、いつも、社会のマイノリティの役目」になってしまうのだ（同上）。もし多数派である異性愛者のほうが自分のことをうまく説明できるなら、同性愛者は、その異性愛者以外の存在、つまり「非異性愛者」と理解すればすむからである。だが、現実はそうではない。
同性愛とは、なにか。ハン・チェユンは同性愛者の人権運動をしている。その当人が、熱心に活動すればするほど「同性愛者とはだれのことなのか、あいまいになって困惑してしまう」という（354-355ページ）。
同性愛とはなにか。ハンは、つぎのようにこたえている。

> 理論に人間をあてはめるのではなく、人間を観察して理論化するのなら、胸に手をあてて良心的に告白するに、「わたしには、わからない」（355ページ）。

なぜなら、さまざまな人にインタビューをしてみると、「同性愛」といっても、とらえどころがなくて、かんたんには規定できないからである。意識や実態が多様だからである。だからハンは「まず、異性愛者に問う」という（354ページ）。ハンは非障害者（健常者）の障害者に対するまなざしを例にあげながら、関係の非対称性をつぎのように指摘する。

> 非障害者の視点から「障害のある人もいるんだ」とか、異性愛者の視点から「同性愛をする人もいるんだ」という「多様性」は、障害者が「そうね、世の中には障害のない人もいるんだ」といって配慮し、同性愛者が「異性を愛する人も理解してあげよう」と尊重するはなしにおきかえてみるとき、コメディーになる（同上）。

ハンは、重要なことは「われわれにとって、ほんとうに必要なのは「人間とはなにか」についての前提を転換することであり、人間が人間をきちんと尊重するすべをまなぶこと」だという。
大事なことは、この社会にはさまざまな人がいることをきちんと把握したうえで、社会をつくるということだ。

> もし、はじめから人間の歩行が両足、あるいは、つえを利用したり、車イスを利用するなど、さまざまな種類の歩行をさすことが前提になっていたとすれば、おそらくこの世のすべての建築設計士たちは…中略…当然のごとく階段以外のものも開発して設計するだろう。…中略…男と女、同性愛と異性愛も、あらためて説明するまでもなく、おなじことである（364ページ）。

いろいろな選択肢があるなかで、ある生活習慣をえらんでいる。そこに優劣をもちこむのではなく、謙虚に自分の立場を相対化することができるようになれば、異性愛中心の文化や制度をかえていくことができるだろう。
「やさしく接しよう」というはなしではない。ごーまんな態度をあらためるべきではないかということだ。

民族ってなんだろう

日本には民族的マイノリティとして、朝鮮人、沖縄人、アイヌ人、さまざまな「外国人」が生活している。それでは、多数派の日本人は、「なにじん（何人）」なのだろうか。「日本人」といえばよいのだろうか。
日本国籍人という軸をつくるとしよう。そのなかには、アイヌ人や沖縄人だけでなく日本国籍の朝鮮人などがふくまれる。「日本国籍をもつひと」という意味での「日本人」と、民族としての「日本人」をおなじく「日本人」と呼称すると、議論が混乱してしまう。そこで、「ヤマト人」や「和人」という名前をあてがうこともできる。しかし、わたしをふくめて、多数派の日本人は「ヤマト人」や「和人」という表現を日常的につかうことは、まったくない。なぜか。それは、「民族」という視点をかかえこむ必要がないからである。端的にいえば、「多数派には名前がない」ということだ。つまり、民族的な多数派は、民族と国籍というカテゴリーを区別しなくても、とくに問題が生じない、なにも問題はないと認識しているのである。
「民族」であるとか「エスニック」というものは、自分たち以外の、なにか「別の人たち」のはなしであると思えてしまうのである。
石川准（いしかわ・じゅん）は『アイデンティティ・ゲーム』でつぎのように説明している。

> エスニック・マジョリティの位置に身を置く者がエスニック・アイデンティティを意識する機会はめったにない。少なくとも、それが自分や社会にとってどのような意味を持っているかをありありと実感することはまずないと言っていい。ところが、エスニック・マイノリティとして生きるのが日常であるような人となると意識は一変する。本名でいくのか通名で暮らすのかの選択、帰化や同化をどう考えるのか、民族差別にどう対処するのか、エスニシティは否応なくアイデンティティの中心に位置する。エスニック・マイノリティとは、エスニシティに無関心ではいられない状況に身を置く人々の別名であり、エスニック・マジョリティとはエスニシティの社会的機能を意識しないで生活できる人々の別名だと言ってもいい（いしかわ1992:20）。

民族的多数派は、自分の民族性（エスニシティ）について意識していない。その一方で、他者に対しては「民族」というまなざしをむける。その結果、無意識のうちにつぎのように表現（呼称）をつかいわけしている。

「にほんじん（日本人）、あいぬみんぞく（アイヌ民族）、つちぞく（ツチ族）」

このようにならべてみると、「じん、みんぞく、ぞく」にはあきらかに序列がある。ツチ族／フツ族などというように、「非先進国」の民族や先住民を「族」と表現することが一般的であり、日本国内の少数民族やヨーロッパの先住民のことは「族」とはよばない。このような序列を設定しているのは、じん（人）＝多数派の日本人である。

うえのような序列をなくすのであれば、すべて「じん（人）」とよぶ必要があるだろう。ヤマト人、アイヌ人、ツチ人といったようにだ。そうしなければ、民族を相対的にとらえることはできない。

現在の社会科学では、民族という概念について議論が発展し、民族というカテゴリーは本質的なものではなく、ゆらぐもの、想像されたもの、社会的につくられるものだと認識されている。「民族というのは幻想だ」ともいわれる。ただ、ここで注意しなければならないことがある。民族というカテゴリーから自由でいられるという、「民族フリー」の「日本人」（多数派）の立場から、「民族は幻想だ」ということは、歴史や社会的背景をふまえないまま、安易な発言をしているのかもしれないということだ。

近代社会は、民族的少数派に制度上の差別をつくり、差別的なまなざしをむけてきた。そのなかで、少数派は自分たちの言語や文化を否定的にとらえるようになり、多数派の文化に同化をせまられてきた。

一方、多数派は近代文明をとりいれる過程で自分たちの文化を欧米化させてきた。しかしそれでも、日常の生活なかで自分たちの言語や文化をまなび、継承し発展させてきた。日本の学校教育は、ヤマト人のための民族教育をしている。ただそれに気づかないだけである。

アイヌの文化権や言語権（文化や言語を継承する権利）をみとめようとしないヤマト人が、つまり、この日本社会の現実が、アイヌが「アイヌでいること」をやめさせたり、あるいは「アイヌであること」をたえず意識させつづける、あるいは、意識させつづけながらも、それをかくそうとさせる。アイデンティティは、そもそも自由であるはずである。それにもかかわらず、アイヌや朝鮮人などの少数派は「アイデンティティのジレンマ」においこまれている。

多数派の親と少数派の親をもつこどもは、さらなるジレンマにおいこまれることがある。「おまえは、どっちだ」というまなざしをむけられ、自分自身もそこで葛藤してしまうからである。しかし、「どちらでもある」のではないか。「どちらも大切」といえるのが重要なのではないか。

平等な関係をきずきあげていけば、どちらかだけを選択することにはならない。片方の言語や文化だけを継承するということにはならない。移民二世の場合も同様である。日本社会で生活していくには日本語が必要である。しかし、親と会話したり、親の家族、コミュニティとつながるためには民族語が必要である。どちらも大切なのだ。

文化の交流がすすみ、さまざまなアイデンティティが交錯する社会では、個々人の生活のなかに複数の文化や言語が共存することになり、複合的なアイデンティティをもつようになる。だれも「一つ」の「なにか」だけにしばられない社会になる。そのような社会を「多文化社会」ということができる。

単一ではなく、複数である。その「複数」は、共存と対立のはざまにある。その状況を、どのようにとらえるのか。

参考文献

石川准（いしかわ・じゅん） 1992 『アイデンティティ・ゲーム―存在証明の社会学』新評論

石川准 1999 『人はなぜ認められたいのか―アイデンティティ依存の社会学』旬報社

窪田幸子（くぼた・さちこ）／野林厚志（のむら・あつし）編 2009 『「先住民」とはだれか』世界思想社

近藤敦（こんどう・あつし）編 2011 『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店

佐藤裕（さとう・ゆたか） 2005 『差別論―偏見理論批判』明石書店

塩原良和（しおばら・よしかず） 2013 『共に生きる―多民族・多文化社会における対話』弘文堂

白石壮一郎（しらいし・そういちろう） 2011 『文化の権利、幸福への権利―人類学から考える』関西学院大学出版会

すぎむら なおみ 2011 『エッチのまわりにあるもの―保健室の社会学』解放出版社

田亀源五郎（たがめ・げんごろう） 2015～2017 『弟の夫』（全4巻）双葉社

鄭暎恵（ちょん・よんへ） 2003 「マルチカルチュラリズムの可能性と困難」『〈民が代〉斉唱―アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店、199-234

テッサ・モーリス=スズキ 2013 『批判的想像力のために―グローバル化時代の日本』平凡社ライブラリー

中村尚弘（なかむら・なおひろ） 2009 『現代のアイヌ文化とは 二風谷アイヌ文化博物館の取り組み』東京図書出版会

ハン・チェユン（한채윤） 2003 「ある非異性愛者、異性愛を問う」『当代批評』夏号（22号）、352-365（朝鮮語）

松波めぐみ（まつなみ・めぐみ） 2001 「『障害文化』論が多文化教育に提起するもの」大阪大学大学院人間科学研究科 修士論文 http://www.arsvi.com/2000/010300mm.htm

宮島喬（みやじま・たかし） 2014 『多文化であることとは―新しい市民社会の条件』岩波書店
森山至貴（もりやま・のりたか） 2017 『LGBTを読みとく―クイア・スタディーズ入門』ちくま新書
好井裕明（よしい・ひろあき）編 2016 『排除と差別の社会学 新版』有斐閣

ポイント解説：

アイヌ：日本政府は、2008年にアイヌ民族を先住民族として公式に認定した。日本は単一民族の国ではないと公式に宣言しているといえる。アイヌに関しては、1997年に廃止された「北海道旧土人保護法」、それにかわって制定、施行された「アイヌ文化振興法」がある。『現代のアイヌ文化とは』（なかむら2009）、『「先住民」とはだれか』（くぼた／のむら編2009）などが参考になる。北海道博物館にくわしい展示がある。2020年に国立アイヌ民族博物館が開館する。それまで民間で運営されていたアイヌ民族博物館をとりこわし、国立の博物館をつくる。これまでアイヌ民族についての施策は北海道に丸投げされてきたことを考えれば国立の博物館の設立は意義ぶかいといえる。
そして、つい最近、アイヌ新法ができた。

LGBT：性的少数者（セクシュアル・マイノリティ）について、最近ではLGBTという用語が普及している。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字である。性的マイノリティのあいだでは、LGBTという用語を積極的につかう人と、つかわない人がいる。たとえば雑誌『現代思想』の「LGBT」特集号が参考になる（2015年10月号）。ちくま新書の『LGBTを読みとく』も入門書／読書案内として最適（もりやま2017）。

おすすめ映画

『あん』。日本の映画では、これ。

『Xメン』シリーズ。特別な能力をもつ「ミュータント」が地球上で差別や迫害の対象になってしまう状況をえがいている。そこでモチーフにされているのは、アメリカにおけるアフリカ系市民の公民権運動、性的マイノリティの権利運動などである。さまざまなマイノリティの視点から「よみとく」ことができる物語になっている。

『サム・サッカー』。ふつうってなんだろう？ 思春期の高校生が大学に進学するまでの悪戦苦闘をえがいている。

『ベッカムに恋して』。ふたつの文化をいきる移民2世のアイデンティティとジェンダー。

『GO！』。名前とアイデンティティについて。アイデンティティからの自由について。原作の小説もおすすめ。

『マッドマックス 怒りのデス・ロード』。みるしかない。

『もし、あなたなら 6つの視線』『視線の向こうに』。人権についてのオムニバス映画。韓国の国家人権委員会が制作（内容は監督にまかせて、制作費を助成）。

『リトル・ダンサー』：スティーブン・ダルドリー監督。この監督の映画はどれも名作。

おすすめドラマ：『問題のあるレストラン』『コウノドリ』『glee』『僕のいた時間』『グッド ワイフ』（アメリカ）

コメントの紹介

部落差別についてリバティおおさかで学んだ。太鼓作りを代表とする皮革産業が、当時同和地区とされていたところでは部落産業として発展していた。（太鼓の皮＝動物の皮をはぐ＝汚れの仕事、といった具合）そのころの実際の様子を写真で見せてもらったが、地区の区切りはあからさまで、一本路地を入ってしまうと家もボロボロといったようだった。今は差別がなくなったと感じるが、少なくなったかもしれないが完全になくなったわけではなく、「見えない差別」「SNSなどによる巧妙化」というように差別の形が変わった、とも学んだ。全く関係（関わり）のない人をただ攻撃する差別だと思った。

———

私の住んでいる町岐阜県美濃加茂市には、本当に多くの外国人の方々が住んでいます。町内放送では、日本語の後に必ずポルトガル語放送が流れます。外国の方々は、家の外でほぼ毎夜ご飯を食べていて、とても楽しそうです。外国の方々を異端としてみるのではなく、自然に受け入れることのできる市内で過ごせて良かったと思いました。高校のとき、「『部落差別』って今だにあるんだね」と母親に言ったところ、母が、「めっちゃかっこ良くて、運動もできて、リーダー気質の男の子がいたんだけど、その子の出身が部落差別されてしまうようなところで、一時期話題になってかわいそうだった」と言っていました。その人の中身でなく、そんな事で判断することは、おかしなことだと思います。部落差別をとりあげた昔の小説があったと思うので読んでみたいと思います。神戸大に行った友人が、「岐阜っていうとバカにされる」と言っていました。それに対して私は「同じ日本人だから、一緒なのにね」と軽く返事をしましたが、「日本人」という枠組みで囲ってしまうことはよくないな、と反省しました。他の文化や特色を尊重することはもちろんですが、大学の友人に岐阜の有名なものを聞かれたときに自信をもって答えられるくらいには、文化を知っておきたいです。だから、まずは地元の歴史を学んだ上で文化を知りたいと思いました。高山に遊びに行ったとき、昔のものを見たのですが、町火消しのマークや服がとてもかっこ良かったです。それも1つの文化かなと感じました。

———

私は三重県出身なのですが、先生が「同和教育を受けたことがあるか」という質問に対し、全然手が挙がらないので驚きました。同和教育の授業のとき、担任の先生（関東出身）が「こんな授業、俺は受けたことないな」と話していたのを思い出しました。小中高とずっと“部落差別”について、実際に差別を受けた人の話をきいたりしていました。…後略…

———

…在日ブラジル人の友人…中略…彼は7歳の頃から日本に住んでいて、現在は22歳です。一人暮らしをしながらフリーターをしているのですが、様々な問題に日々悩まされていると話してくれます。アパートを借りる際に、身分証を提示した瞬間に嫌な顔をされる。アルバイトの面接に行き、国籍をブラジルだと話したら、その場で落とされる。そして、このような問題解決の為何度も日本国籍の取得をこころみるのですが、申請がなかなか通らないようで、ブラジルからは今でも徴兵の便りがくるようです。彼の顔、言葉は殆ど日本人そのものであるが故に苦しむことも多くあるようです。漠然とした多文化共生という思想はいつ実体を生み出すのでしょうか。

———

…近年、高校野球人口が減っているが、理由は、丸刈りが嫌だからというものが大半だそうだ。高校球児＝丸刈り坊主という文化が根付いてしまっているがための弊害だと思う。その中で、丸刈りを強要しない高校が増えてきている。これは、競技人口の増加だけでなく、よくない文化を変えて、新しい文化をつくるという結果も生まれる施策だと思う。

———

…最近になってYouTubeに『蒼い記憶』という、満蒙開拓青年義勇軍を題材にした長編アニメがあるのを知り、よく見ています。また、それに関連して、戦争や移民の動画もよく見ています。

———

私は昔アメリカに住んでいました。戦争から何十年もたった当時でさえも一部のアメリカ人に“Jap”と呼ばれたりしました。日本に帰ってきてからも帰国子女というマイノリティーだったので好奇の目で見られたり、心ない言葉を言われたこともありました。…後略…

———

…差別と区別についての違いを、先生なりの考えを聞いてみたいと思った。…後略…

【あべのコメント：区別して、対応に差をつける（冷遇する）ことが差別です。対応に差をつけない、ただの区別であれば差別ではない（相手が嫌がっているのに「差別じゃなくて区別だ」というのは意味のない弁明）。アレルギーのある人に対応することは差別ではない。】

———

…プロテニスプレイヤーの大坂なおみさんが、日本人なのかという議論を以前よく見掛けました。日本において「日本人」を考え直すことが必要になってきているなと感じています。

———

…移民として海外へ移住した日本人たちは外国語を話せたのですか。…後略…

【あべのコメント：事前に簡単な語学研修をうけてはいても、基本的には現地の言語はほとんどできなかったでしょうね。いまでも状況はあんまりかわらないでしょう。英語はある程度できるけど、という人が数年間の海外勤務をこなしているという例が多いのではないかと思います。】

———

前に新聞で見た読者からの声を書いてある欄に、黒人の女性から「日本でモデル募集の要項を見ている際、『外国人・黒人も可』と書かれていることに違和感を覚えた」という声があったのをとても印象的に覚えています。「多文化共生」

というのを目指して、マイノリティを意識し、受け入れよう、という思いはあるものの、マイノリティを意識しすぎるというのも問題なのかなと思いました。受け入れる、許容しているはずの言葉が逆に除外していることになることもあるんだと考えさせられ、多文化共生の難しさを教えられました。

【あべのコメント：にたような話に、不動産屋の文言で「ペット・外国人可」というのがあります。そもそも排除してはいけない要件で排除する実態があることが問題で、うえのような文言は、その現実をうつしだすものであること、そして、当然のことをアピールするのは上から目線だといえます。】

———

…僕が以前から疑問に思っている問題が1つあります。よく温泉か銭湯に行くと「タトゥーの入っている方の入湯はご遠慮ください。」というような掲示を見かける。外国人でタトゥーを入れている人はよく見かけますし、今は日本人でも入れている人もよくいる。実際に僕の知り合いにも入れている人がいる。もともとは暴力団関係の人に入れている人が多く、トラブルになるのを防ぐためにそのように書いていたのであろうが、「タトゥーを入れている人」＝「悪い人」だと見なしてそのように書いているのは少しおかしいと思いました。これも多文化社会における問題として考えてよいのではないかと思いました。

【あべのコメント：とても大事なテーマです。たんに個人のファッションにとどまらず、民族文化にもとづいたタトゥーもあります。タトゥーが目立つ、ヤクザに見える人が銭湯にいることがじっさいありますけど、なにかこわい思いをするわけでもない。】

———

多文化社会と聞いて頭に浮かぶのは、セクシュアルマイノリティについてです。…中略…最近、ユーチューブを見ていて、あるレズビアンカップルのユーチューバーチャンネルを見つけました。その方達の動画を見てみると、LGBTについて色々なことを学ぶことができました。今、ユーチューブというものがすごくメジャーになってきているので、そこで様々な知識を広めることができるのはとてもいいことだと思います。…後略…

———

私は現在、日本人の中国に対するイメージに疑問を持っています。友達に中国に短期留学に行ったと言うと、“え？中国？？”と言われることが多くありました。私は高校2年間で北京出身の先生に中国語を教えてもらっていました。その中で中国に関する話をたくさん聞き政治の面や文化の面などの多方面から中国の情報を得ていました。そのため、中国にとても興味を持ち、留学の話をもらったときにすぐ応募することを決めました。しかし、友達からは中国を批判する声が多くありました。理由を聞くと“TVで見たから”というのがとても多かったです。…後略…

———

大阪人権博物館へ行き、様々な人権問題や部落差別についての話を聞いたことがあります。話の中で、地域の人は別の地域からやって来た人が多く部落差別への関心がなくなりつつあると聞き、問題が忘れられる恐れを感じるとともに、二度と同じ過ちを犯さないためにも歴史を伝えていく必要性を感じました。ビデオを見て、社会的弱者などの少数派が自ら声を上げたことで、社会が問題に目を向けられるようになったと知る一方で、理想の順序は、少数派が声を上げる前に社会が対応するという流れであるべきだと考えられました。…後略…

———

移民というワードを聞いても最初は良く分からなかった。…中略…住む場所をなくした民が自国を捨て他の国へ移る場合もあれば、戦争でやむなく逃れたという場合もあるだろう。自ら決断して渡って来たというのもあるはず。…後略…

———

…移民と聞くと、私も日本に外国から入ってくる人というイメージでした。思い返してみると、江戸時代ぐらいでも外国に日本町を日本人がつくったことを思い出しました。…後略…

———

多文化社会としての日本の歴史をもっと振り返って学ぶことが必要だと感じました。過去の出来事と、その結果どうなったのかということを知っていれば、今同じようなこと、共通する部分がある出来事が起きた時に、どう対処するべきかということの手掛かりになると思います。同和教育において、そっとしておけば無くなることは無かったのだから、現在の外国人差別に関しても、もっとしっかり教育したり、そのような現状があることを認識していくべきだと思います。

———

…最後に紹介された「舞鶴引揚記念館」は行ったことがあります。私の祖母が赤ちゃんの時に中国から引き揚げられて日本に帰ってきたそうで、その資料をきぞうしたいという祖母の目的でついていきました。

———